
ANPANMAN～驚異の真実～

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AN PAN MAN～驚異の真実～

【Zコード】

Z6457M

【作者名】

ぬじやわきし

【あらすじ】

貴方は知らない・・・テレビでは楽しそうにしているアンパンマンの驚異の真実の物語を・・・

プロローグ

未来世紀2。そのころの人類のテクノロジーはかつてないほどに発達した。だが、それはさまざまな弊害をもたらし、環境汚染や運動不足等による人類の弱化、便利な機械の登場で経済状態が崩壊し、混迷を迎えていた。

そんな時、とあるパン屋の主人飯綱秀和^{イイズナ・ヒデカズ}は無料配布を思いついた。

というのも価格の崩壊で売れのこりが大量にあり、その処理に困っていたからだ。いつしか彼は町の人々に尊敬され、「ジャムおじさん」とのあだ名がつけられた。強面の中からにじみ出る暖かい笑顔はだれが見ても心が癒された。

だが、そんな彼にも隠れた一面があつた。彼はバイオ・テクノロジーの権威で、夜な夜な人造人間を製造していた。そして今までショクパンマンやカレーパンマン、ロールパンナちゃんやメロンパンナちゃんやテンドンマン等が製造されたが、どうも彼にとつてはしつくり来なかつた。中には失敗作もあつたからだ。彼は人造人間らをパン屋の従業員や町の警備に使つた。人間たちはすっかり弱ついてパトロールには役に立たなかつたからだ。

だがある日、飯綱はとてつもない物質を発明する。「ANC0」と名づけられたその黒い物質は、とてつもない自発的なエネルギーに満ちていた。この物質はもしかしたら最高の人造人間が作れる。そう飯綱は確信した。人類はいまやすっかり衰退している。ならばこれで新人類を創生するのだ！これぞ人類の希望だ！

そして、作りはじめた。今まで最高傑作になると確信した飯綱は、神がアダムにしたように、自らをかたどつた姿にした。そうする事

で自分が神だと彼は優越感に満っていた。おお、なんとう。これは。

そしてさういづ出来上がった。その名は・・・

アンパンマン - ANPANMAN -

アンパンマンは周囲に好かれていたかというと、そうでもない。彼は皆から疎まれていた。禿で、強面で、一見怖そうで、その上、声が非常に高かつた。

彼は少なからずしょくぱんまんに嫉妬していたと言えよう。しょくぱんまんはハンサムでイケメンで演劇の能力等にも長けていて、才色兼備そのもののタレントであった。ほかの人造人間は顔が汚れると弱化する欠陥があつたが、彼だけは汚れを拭けて、つまり対処できた。その意味ではアンパンマンの次に完全たる人造人間だったに違いない。

アンパンマンと違つて町中の人気者であった。たとえ、会話で一人称を「ワタシ」と言うようなキザでも彼を慕う人は山ほどいて、写真集などもある日出版していたし、歌手デビューも果たしていた。

そんなスターに輝くしょくぱんまんだが、彼自身、内心は不安であつた。なんとなれば、創造主、ジャムおじさんこと飯綱秀和の寵愛を受けているのは自分ではなくアンパンマンであつたからだ。やがて用なしにされるのではないかと彼は不安におびえた。それからというもの、アンパンマンとしょくぱんまんの確執が始まり、それはやがて冷ややかなイジメにまで発展した。主にアンパンマンがいじめられたのだが、アンパンマンは何を考えたか抗議せずひたすらそれに耐え抜いた。

アンパンマンのもう一つのコンプレックスは飛ぶ速さであった。圧倒的にメロンパンナに負けていたのだ。その上彼女はアンパンマンよりも顔の耐久力が強かつた。とはいえ、彼女は優しかつた。アン

パンマンのよき友達として語り合つたりもした。アンパンマンは彼女を信頼していた。飛ぶ速さが速いので、伝言などに頼んだ事もあるが、その時はいつも、なんとなく歯痒い思いをしていた。

そんなコンプレックスの多いアンパンマンだが、彼も哀れみに思う相手はいた。カレーパンマンである。カレーパンマンは、ジャムおじさん飯綱の不良品で胃酸が非常に強力すぎたため、一日に4度、発作的にゲをした。そのうち次第に彼は衰弱して、顔は土氣色で垂れ下がつた。見るからに人間として危険な気がしたのだが、飯綱はなぜか彼をほつと/or>いていた。もう不良品だからとあきらめていたのかもしれない。

アンパンマンの数少ない友達は、メロンパンナのほかに一人いた。町の住人で、菅野藍ちゃんと、武田祐樹くんだ。これはあるきっかけがあった。

アンパンマンとメロンパンナがいつものように歩いていたときである。菅野藍ちゃんと武田祐樹くんが泣いていた。なにがあったのかと聞いてみると、いじめっこにいじめられたのだと。かわいそうにとメロンパンナが慰めようとしたとき、アンパンマンは制止した。

「ぼくがげんきにしてあげる。」

そういうてアンパンマンは突然頭をぎゅっとつかんだ。ぐぐぐと力を入れ、アンパンマンは歯を食いしばつた。やがてピキッという音がアンパンマンの頭蓋から響き、メリメリッと裂ける音、ビリヤつと頭の一部が頭から引き裂かれ、「ぬあああああああああああああああ！」とアンパンマンは吼えた。

「ほひ、食べて。」

そういうて頭の一部を一人に上げた。中には「餡」がこぼれ落ちていた。アンパンマンの頭からもぼとぼと黒い「餡」が出ていた。藍ちゃんと祐樹くんは顔を見合させて頭を食べた。それは大変おいしかった。

以来、二人とも仲良くなつた。町の人々の中では唯一の理解者ともいえよう。

だが、ある日。町に危機が訪れた。

ばいきんまんの襲撃

悲鳴が町中に響いた。それは決して嬉しい悲鳴などではなく、不吉な、確かな本能的な助けの求め他ならない恐怖の悲鳴であった。

空に紫色の円盤が浮かんでいた。円盤から細菌兵器が飛来する。といつても、大抵の読者のみなさんが想像するような、ちいさなちいさな目に見えないアレではない。なぜか3m4mもある、巨大な塊なのだ。それが円盤から墜落して地面に衝突して潰れた。

ひううう、ベしゃ。ひううう、ベしゃ。ひううう、ベしゃ。

そしてそのまま膨らんで、「いじいじいじいじ」と呻きながら人々を襲つてきた。

円盤の正体は明らかであった。あの特徴的な形。明らかにそれは“ばいきんまん”とよばれる極悪犯罪者であった。機械工学と生物学に長け、全身に紫色の化粧と、特殊な入れ歯を使つたそのおぞましい姿は、UFOにも描かれていたそのままの姿で、人々を恐怖に陥れていた。

「由々しき事態だ。」

ジャムおじさんはパン工場内の会議室で顔をうつむかせて言った。その顔の左半分は影で真つ暗だ。

「あれは、世界でも有名な巨悪な悪党だ。只ならぬ装備をしており、われわれ普通の人間では太刀打ちできぬ力を持つている。そこでだ。

「ジャムおじさんはバタコと目を合わせ、次に人造人間たちを見回して言った。

「君たちの出番だ。今回最重要任務として、ばいきんまんの母船を破壊する任務を与えられるのは・・・」

ジャムおじさんは指差した。

「アンパンマンだ。」

やねやねざねどざねめぐ。しなぐせんまんがあからさまな嫌悪感を

顔に出したのでシャムおじさんは補足説明する。

「もちろん任務は母船破壊だけではない。通称“かびるんるん”と呼ばれる細菌を、それをバラマく子機ごと破壊するのも君たちの使命だ。詳しくはわが忠実なる部下バタコが説明する。アンパンマン、来ててくれたまえ。」

ジャムおじさんはアンパンマンと言つた。

「これは最初の戦闘任務だ。くれぐれも気を抜くな。」

「了解しましたジヤムおじさん。」

よしきた

ハサチが開いた
シャムおじさんはハサチの夕を指差して叫んだ

「それ行け！アンパンマン！」

突然母船の行く手をさえぎるものが現れるを見て、ばいきんまんは
どくどくのしわがれ声で唸つた。そして母船からガトリングガンを
せりだして撃つた。

アンパンマンはたぐみにそれを避けて、先制攻撃をする。通称「アンパンマンキック」でガトリングガンを破壊した。

「なにい！ ではこれを食ひて！」

すると円盤からなにやら液体が飛び出した。それはアンパンマンの顔にかかつた。煙が出てきた。

「なに・・・これは・・・硫酸・・・」

たちまち顔が凹んで溶け出した。中身の「ANNO」も飛び出し、あまりの苦痛に「ぐわあああああ」とアンパンマンは呻いた。

この状況に恐慌を感じたジャムおじさんは、「アンパンマンー首を外せ！」と無線で伝えた。ジャムおじさんの意図は伝わり、アンパンマンは自動的に首をぼろつと外した。首はそのまま落下し、どこかの森の中にがさりと音を立てて失くした。

首のないアンパンマンはそのまま浮かんでいた。あまりの不気味な姿にばいきんまんも沈黙していた。

その時、突然何かがアンパンマンの首の断面に命中した。それはぐるぐると回転し、おさまった。それは新たな首であった。なぬ、新しい首だと・・・とばいきんまんはどこから発射されたか見た。ジャムおじさんが投げたのだ。ばいきんまんはそれを見て目を疑つた。

「お前は・・・」

その隙を突いてアンパンマンは高速で飛び「アンパンチー」と体当たりした。円盤は大破し、空へ空へと飛び上がった。心なしか「バイバイキー」との声が聞こえた気がした。

「よくやった。アンパンマンには感謝しそうと思つ。ではみな、報告を頼む。」

「ジャムおじさんが言うと、メロンパンナが立ち上がり言つた。
「A区、3人けが人が出た他は全員無事。」

カレー・パンマンが立ち上がりつて言つた。

「B区、5人重態に陥つたが他は無事、
おうううつえれろれろれろ。」

ショクパンマンが毅然と立ち上がりて言った。

「ですが？」

「テンドンマンが殺されていました」
テンドンマンとはジャムおじさんの不良品の一つで、頭の上半分が
なかつた。そのため、脳が丸出してあつた。

「はい、どうやらばいきんまんが我々へのアピールのために頭蓋の中身を食べて殺しましたようです。カーバリズムってやつですね。はははは。」

「笑い事ではない。」
「失礼しました。それと・・・」

「メロンパンナさん。」

「あなたの姉、ロールパンナが誘拐されました。」
メロンパンナは驚いてしょくばんまんを見た。

しばしの沈黙。その沈黙を破つたのはいそいそと会議室のドアを開けたバタ「さん」であった。

「報告です。墜落したばかりの船を調べたところ、死体はありませんでした。どうやら脱出したようです。」

「え？ まだ生きているのだな。」

ばいきんまんの物語

ビービービービー…

鳴り響くサイレンと共に赤色に点滅する操縦席に揺られながら、ばいきんまんは脱出装置を作動した。その間も彼は、自分の目撃した光景について考えていた。アンパンマンと言う謎の物体。そしてジヤムおじさん飯綱秀和。たちまちばいきんまんからかつてない怒りがこみあげ、悔しさと共に「チクショー」と叫びながら墜落する船から脱出した。そして待機していたドキンちゃんに救助されたが、その時もばいきんまんは過去の思い出に浸っていた。

ばいきんまんの本名は眞辺リチャードであった。ハーフで、紫の化粧と不気味な入れ歯を取るとキアヌ・リーブス並にハンサムであった。

工学系の大学に入り、眞辺は最優秀の成績を取つた。もはや将来有望と周囲から賞賛の嵐で、彼自身も優越感に浸つていた。

だが、ある日から変わつた。突然飯綱秀和と言う名も知らぬむくれ男が最優秀の成績を取り始めた。なんと眞辺の論文を盗み見して、さらに提出する眞邊のを改ざんしたのだ。以来眞辺は評判が落ち、ある日からぷつつりと姿を消した。

彼は世に復讐するため犯罪者にならうと決心したのだ。それも何らかのシンボルを兼ね備えた、象徴的な悪人へと。世間から忌み嫌われる事からばい菌をキャラクターを選んだ。そして強盗、略奪等の犯罪行為を始めた。

眞辺にはいつもそばにドキンちゃんと言つあだ名の女性がいた。彼女は、彼の恋人で、結婚こそしていなかつたが同棲をしていた。彼女はばいきんまんを常にサポートした。ややこしい工学知識もすぐに覚えたので眞辺にとつては組織的に精神的にかけがいのない存在となつた。

「あああ、ドキンちゃん、ドキンちゃん……」

とさめざめと泣きながら化粧を落とした眞辺は彼女にすがりついた。眞辺の犯罪時のしわがれ声も実は作り声で、本当はごく普通の男性の声よりやや低音に響く程度であった。

「あああ、ドキンちゃん……」

「どうしたの？リチャード。」

ドキンちゃんは彼の頬を撫でながら優しく尋ねた。眞辺は答えた。「ボク、分からなくなつちやつたんだ。」「何？」

「ボクのやつてる事つて、世の中への恨みなのかなあ、それとも個人的な恨みなのかなあ？」

「それがどうしたの？」

「もし、個人的な恨みだつたら、ボクのやつてる事つて何だか勝手な気がして……」

「勝手？そんな事ないわよ。今まであなたのやつた事、素敵だわ。あなたの支持者も、まあ養殖したかびるんるんとは言え、沢山いるじゃない。」

「そりや、そうだけど……」

「いつまでもくよくよ悩むのは良くない事よりリチャード。ほら、城内のあの子から情報を聞き出す仕事が残つてるじゃない。」「そう、だね……」

ばいきんまん眞辺リチャードのアジト、通称ばいきん城にメロンパンナの姉、ロールパンナが捕われていた。彼女ら姉妹は不良点があ

り、皮膚が傷だらけであった。それでもメロンパンナはメロンパンとして生きていけたがロールパンナに至っては包帯で覆わなければならぬ有様であった。

眞辺は再び化粧をして、ロールパンナの部屋に入った。化粧さえすれば、纖細で軟弱な眞邊は、暴虐なばいきんまんへと人格を変える事ができる。ばいきんまんはだみ声で強く問い合わせた。

「アンパンマンが一体何なのか、吐け！」

拒めば電気ショックが流れた。それは多大な、精神的肉体的苦痛を「」えるものであった。

そして長時間の拷問の末、ロールパンナはとうとうアンパンマンが飯綱の重宝する人造人形であること、アンパンマンに「ANCO」と言う物質が多量に含まれていること、アンパンマンが二人の子供、藍ちゃんと祐樹くんにその一部を「」えたことを妹から聞いたなどを白状した。

その話を聞いて眞辺はにやりとほくそえんだ。「ANCO」か、そうだ、「ANCO」だ！あの技術、あれだけは飯綱オリジナルの技術だ、あれが欲しい、あれが、欲しい！

ばいきんまんは言った。

「」協力ありがとう。最後に…

最後に？ロールパンナは不安に陥った。

「最後に…」

ぶしゅう！ロールパンナは催眠ガスを吹き付けられ、彼女はそのまま眠り、意識を失った。

アンパンマンの旅立ち

空を飛びながらじりじりして自分は無事に帰されたのだろう、とロールパンナは思った。あの麻酔を吹き付けられた時、その後で何をされたのか、変な手術でもされたのかもしれない、とロールパンナは悟った。しかし、こち早くジャムおじさん達に伝えなければ。藍ちゃんと祐樹くんが危ない。

森にたどり着いたロールパンナはあたりを探し回った。ジャムおじさんか一人の子供、どちらかを発見せねばならない。だが途中ですれ違つたのは復活したテンデンマンだけであった。彼は相変わらず脳を晒していた。彼の声は森の中に虚しく響いた。

「テンデンデンデンデン… テンテンデンデン… テンテンデンデン… テンテンデンデン… テンテンデンデン… テンテンデンデン…

途中テンデンマンは蹴つまはずいた。

「テンテンデンデン… ヒヤッ…」

頭から脳髄がこぼれ落ちてそのままテンデンマンは再び死んだ。その時森からがさがさと音がした。なんだろう、とつさに振り向くとアンパンマンだった。アンパンマン… 彼なら子供たちを守つてもらえる、そういうつた安堵感と共に徐々にアンパンマンに対する殺意が沸いてきた…

「リチャード。」

ドキンちゃんが眞辺に尋ねた。

「ロールパンナだけ… あの子に向をしたの？」

眞辺はビクビクと答えた。

「ボク… アンパンマンに… なんか… できればって思つて… かびるんにも使つた、『洗脳チップ』を埋め込んだんだ… アンパンマン

を見たら排除するような…」

「そり…」

突然沸いた殺意にロールパンナは驚いた。だがアンパンマンを見れば見るほど怒りがうつ積し、激しい憎しみにかられた。無意識の中にアンパンマンの顔が大量に現れ、ロールパンナは意識を失いつつあるのを感じた…

気が付くとロールパンナは再び全身を縛られていた。側にジャムおじさん飯綱がいた。

「どうした、ロールパンナ。アンパンマンを危うく殺しかける所」「アンパンマン?」

その言葉を聞いた途端再びロールパンナに狂気が現れて暴れだした。「うがあああ」と暴れながら白眼で拘束具をほどこつとしたが不可だった。

しばらくして彼女は正氣に戻り、尋ねた。

「あの…私…どうしたんでしょう?」

「うむ…」

飯綱はしばらく考えて、言葉を選びながら話した。

「君はおそらく拉致されたばいきんまんのアジトで脳内にチップを埋められた。そしてある人物やそれについて見たり聞いたり、とりあえず意識に現れると殺意が沸くようプログラムされた。」

「…」

あまりの事にロールパンナは息をのんでしばらく黙った。そして尋ねた。

「ジャムおじさん…私治るんですか?」

「私にはどうする事もできない。それはおそらく生体チップだ。だから探すのが難しい上に解除方法が分からぬ。無理に切除したら死ぬ。君はテンドンマンみたいに単純な初期作ではないから、蘇り

も不可だ。」

「…そのチップの“相手”はきっと、ぱいきんまんの嫌がる強い方なのでしょう…」

そうロールパンナが言つた時、彼女の目が濁り始めた。“彼”が意識の片鱗にも現れるだけでチップが作動した事にロールパンナは焦燥感を抱きながら言つた。

「“彼”や仲間たちにお伝え下さい。菅野藍ちゃんと武田祐樹くんが危険です。」

「そして調べたら一人の子供はすでにかびるんるんに拉致された。」

た。

そう飯綱は会議室で言つた。

「そこに落ちていた脅迫状には切り貼りでこう書かれていた。『ばイきんまんより、あんパンまんを『こせ』彼のアジトはこの、地図の丸印だ。ロールパンナから聞いた。』

「じゃあ僕が行きます！」

「そうアンパンマンは立ち上がりつて言つて、嫉妬にかられてしまふまんが言つた。

「はは～ん。アンパンマンなんか行つてもあつといつ間にやられてしまいますよ。それよりも私です。私こそが、この任務にふさわしい…」

「じゃあ、二人で行けばいいのでは…」

そうカレーパンマンが言つとしょくぱんまんはあからさまな敵意を持つて反論した。以前からこの一人には確執があった。

「アンパンマンなんかと一緒に行く？そんなの足手まといになつて

負けるがオチですよ。」

「そんな事は…」

「はあ？ 逆らうのですか？ お前に力がないくせに。」

突然カレー・パンマンはブチ切れてしまくパンマンに殴りかかった。二人は揉合い争つた。そしてカレー・パンマンは突然例の反応を起こし、それがしょくパンマンの右腕にかかつた。

「あつい！ いたい！ いたい！」

としょくパンマンは飛び上がった。右腕が強酸の胃液でやけどのような状態になつた。それを見てカレー・パンマンはゲタゲタと狂笑しながら嬉しそうに叫んだ。

「見つけたぞ！ オレの得意技見つけたぞ！ オレ得意わつ…」

しょくパンマンはカレー・パンマンに一撃を『えカレー・パンマンはそのまま昏倒した。

しばしの沈黙の後、アンパンマンは言つた。

「しょくパンマン… 君は許されない事をした。なぜテレビでは冷静だつた君が…」

「テレビは公共だ。だから見えない一面もある。仕方ないではないか。子供のために君をモデルにしたドラマ『それいけ！ アンパンマン』に、『しょくパンマン』役で出演してるのだから。それで仲間を殴るか？」

「君がそういう事をしてる事をマスコミに知られたら子供たちは失望し評判はがた落ち、視聴率が下がる代わりに犯罪が増えるぞ。」

「ふふんっ、お前に何が分かる！」

しょくパンマンは飛びかかつたが、アンパンマンは彼を一撃で倒した。

そして出撃のシャッターのスイッチを作動した時にメロンパンナが来た。彼女は言つた。

「友達として言わせてもらひうわ。藍ちゃんと祐樹くんはおとうよ。バイキンマンはあなたが欲しいのよ。』ANCIO』を狙っているのよ。多分お姉ちゃんの異常も彼の作戦よ。あなた一刻も早くロールパンナから離れたいんでしょう。彼女のためにも自分のためにも。でもあなたが行つたら彼の思ひつけだわ。」

シャッターがゆっくりと開いた。アンパンマンは外を一瞥して再び向き直つた。そして言つた。

「友達として……？」

「そうよ。友達として言つわ。私、あなたを失いたくないのよ。」

「……」

アンパンマンは沈黙した。メロンパンナは切迫した顔でアンパンマンを見つめた。

そしてアンパンマンは後ろを向いた。シャッターの外を見つめていた。まさか、とメロンパンナは愕然とした。アンパンマンは言つた。

「君は友達じゃないよ。」

突然の言葉。メロンパンナは思わず叫んだ。

「そんな訳無い！私達は、友達よ。」

「いや……」

アンパンマンは鼻をすすり田を拭つてからこう言つた。

「藍と祐樹だけが友達さ……」

そして飛び立つた。風に運ばれて涙がメロンパンナに当たつた。

アンパンマンの旅立ち（後書き）

注・ラストのセリフはオープニングテーマの「愛と勇気だけが友達
さ」です。

旅立つアンパンマンとホーリーマン ついで最終決戦なるか！！

アンパンマンはその屈強な顔を歪めて男泣きしながら飛んでいた。彼は一人考えていた。

… どうしてメロンパンナにあんなひどい事を言ってしまったのだろう。彼女も友達なはずなのに。もちろん、囚われている藍ちゃんや祐樹くんも友達だ。かけがえのない友達だからこそあのよつた事を言ってしまったのかもしれない。

… といひでどうしてばいきんまんは彼らを拉致したのだろう。『ANCO』を食べたのだから彼らから摘出すれば・・・できないのか？

… もしかしたらメロンパンナの言つとおり、オトリのかも知れない。だが、自分はもうあのパン工場にいたくない。ロールパンナはおかしくなり、しょくぱんまんは公衆の面前で嫌悪感をあらわし、カレーパンマンはついに血迷つて嘔吐物に技の活路を見出し、メロンパンナでさえ自分の気持ちを理解してもらえたなかつた。だから…。・ もう、いいのだ・・・。

一方、ここはバイキン城。リチャードは恐怖におびえていた。

「ドキンちゃん。ボク、こわいよ。アンパンマンがくるんだよお。

「大丈夫よ、リチャード。すべては復讐のため、『ANCO』のため。」

「わかつてゐよお。ガキどもの『ANCO』などさうでもこい。だ

うせあれは取れないし。」

「そうよ。」

そう。最初から一人の「ANCO」など彼らには眼中に無かつた。前の拷問で聞き出した情報で、もつとも貴重だつたのは、あの一人はアンパンマンの数少ない友達だつたことなのだ。

「大丈夫よ。アレがあるじやない。あなたの最高傑作。」

「そうだな。最高傑作。」

バイキン城はかびるんるんややみるんなどの職員が大量に存在し、ばいきんまん眞辺が拉致に出かけている間、なにやら機械をせつせと作っていた。唯一ジャムおじさんから盗まれなかつた論文に基づいて、新たな戦闘兵器を作らされていたのだ。

それはアンパンマンと違い、金属製であつた。外観の鉄骨が、さながら人間の骨のよう見え、瞳孔は赤く、きわめて凶暴な顔つきである。これに皮膚をかぶせればシユワルツネッガーそつくりになるとも言われた。ターミネーターみたいだと思われるが、少し違う。彼らの名は「ホラーマン」だからだ。

そして地下の地下、もつとも下の階にはおそらくバタフさんか聞いたら震え上がるような恐ろしい秘密が隠されていた。

バイキンマンに“変身”した眞辺リチャードが来た。ちなみにリチャードの本当の、キアヌ・リーブスそつくりの姿はなぜかドキンちゃんの前しか現さない。ばいきんまんはそこにいた、最優秀のかびるんるんにたずねた。このかびるんるんはメガネをかけていた。

「冷却は？」

「バッヂリです。」

「故障部分は？」

「右腕にありましたが修復しました。」

「不都合な部分は？」

「大丈夫です。」

「武器の調子は？」

「万全です。」

「アンパンマンを倒せるか？」

「さあ・・・彼次第じゃないでしょつかね。」

「そうだな。まあ、ムリだろうが。」

ぱいきんまんとエリートがびるんるんの前には、6mはあるかと思われる巨大なホラーマンの頭部があつた。

決戦！そしてアンパンマンに下された結論とは！

とうとうバイキン城に着いたアンパンマン。黒々としたその地は見たところども密閉されていて侵入はできないようだ。もちろん「ANCO」狙いなら、自分の命を狙っているに違いない、とアンパンマンは考えた。

「ゴウンゴウンゴウン。

突如轟音と共に、地面の巨大なハッチが開いた。何だらうか。中を見たら暗闇だ。しばらくアンパンマンは見守った。そして…

「ウオオオオオ！」

と言う野太い叫びと共に、巨大な鉄人ホラーマンが飛び上がって、地面に着地した。身長6.5mはあるうその鉄人は赤い瞳でアンパンマンを見据え、巨大な手で握り潰そうとした。それを巧みにかわすアンパンマンだが、このままではラチが明かぬと一端離れた。

ちょこまか動いで逃げ出したアンパンマンに業を煮やした巨大ホラーマンは、手足を変形させ飛行機に変身し、ジェットで「ジジジ」と飛び始めた。なにしろ巨大なので、スピードは遅いようで早く、かくして空中で追い掛けられるアンパンマン。ホラーマンから銃弾がだだだと飛んできた。だが飛び道具を持たないアンパンマンに反撃はできない。

「ババンヒュッ！」

銃弾が頭に命中した。あああっと思った次の瞬間アンパンマンは落

ち始めた。

そして地面で横たわるアンパンマン。そこに元に戻ったホーラーマンが手をかざして止めを刺そうとしていた…

すゞおおおん！

ホラーマンは地面に手を押し付け、ぐりぐりと擦り潰した。そしてゆっくり地面から手を離した。

アンパンマンはじめなかつた。

「メロンジュークース！」

突然叫び声が聞こえ、ホーラーマンが振り向くとメロンパンナがアンパンマンを抱えながら、網目模様の傷痕から緑の毒液をホーラーマンに発射した。命中したホーラーマンはたちまちエラーが発生して苦しみ始めた。

၁၂၁

上空からカレーパンマンが強酸の胃液をホラーマンの頭にかけた。ホラーマンは失明し、暴れ回った。山々に衝突し、悲鳴を上げた。そこにしょくばんまんが現れ、止めの一発をホラーマンに与えた。

「ええええええええ！」

ホラーマンは高い高い崖から突き落とされ、激突し、動かなくなつた。

「アンパンマン！アンパンマン！」

メロンパンナが必死にアンパンマンを呼び掛けた。アンパンマンは田をうつすら開けてメロンパンナの姿を認め、言った。

「メ…メロンパンナ…僕は…もう…ダメだ…」

「そんな！」

「さつきは…ひどい…事言つて…『めん…ぐほつぐほつ』」

咳き込んだ時、アンパンマンの口からアンコが出た。

「お願い、しゃべらないで！いいわよ。分かつてたわ。」

「メロンパンナ…」

「もうしゃべらないで！」

だが彼はしゃべり続けた。

「メロンパンナ…おまえが…」

「…？」

「す…あ…ぐはつ」

そのままアンパンマンは事切れた。メロンパンナはメロン色の涙をぼろぼろ流し、大泣きした。

「だつて…私も好きだったのにい！なんで始めからいわなかつたの！ばか！ひどい、ひどいよおおーするいよおおー！私を置いてかないで！」

うわああああんと泣く声に、ジャムおじさんは沈痛な面持ちで帽子を脱ぎ、胸に当てた。そしてアンパンマンに近付き、首を外して天に掲げた。その死顔は美しく、暗いこの地で光輝いているように見え、皆大泣きした。

「そんな！」

「ごめん、『めんよ』！」

「アンパンマン…」

「謝る！謝るから！」

そしてジャムおじさんは首を下ろし、首のないアンパンマンに一礼して言った。

「愛する人を守るため、愛する人を救うためにとつたアンパンマン

の手段はなんと高潔な事か。我々も彼を見習い、共に生きて行こう！
！今我々が生きているのは彼のおかげだつたから！」

「今我々が生きているのは彼のおかげだったから！」

そしてシャムおじさんはアンハンマンに新しい顔をはめた。
ンマンは立ち上がりて叫んだ。

一元氣百倍！アンパンマン！

かくしてアンパンマンがあつさりと蘇り、皆呆然としていた時、バ
イキン城のハツチ=門が開いた。そこから大量の2mほどのホラー
マン兵が現れた。

千、いや一万ぐらいいるぞ。

「勝てるのかなあ。」

勝てるさ。

「やつだよ。皆が団結すればそこに勝利がある！」

そして、アンパンマン達、そして大量のテンドンマンがホラーマンに向かって突進した。

「うー」「うー」「下凹」しゃわああ、ビジジジジ、ジジジ「ロンジ
コース、メロンジコース、メロンジ」ビジジジ、どがどがどが、
すこん、ばたん、「ええええ！」どん、がん「伏せろ！」ただだ
だだだだだだだきゅんきゅんだだだだ「ぐわ」「ぬわ」「どえ」
「ぐわ」だだだだだだだきゅんだだだだ「ンキーック！」どがん
らん、ごすごす、ぐしゃ、ぐさつ、ごつん、「テントンドンドヒヤ
ツ」ばん、ばん、がす「逃げろ！」ずがああああああああん
ん……かん、ぐしゃ、ずこん、がん……ほん……どさ
つ……ぐそぐそ、ヴィゴーン、ゼヤロン、ゼガ、ズガ、ズジン「ア
ンジ、ファーンチー」ヒュン、ずがががががががががが
「デヒヤツ」がががが、どじん。

「よし、骸骨どもは掃討した。内部に侵入だ！」

そしてアンパンマン達はバイキン城に入った。残るホラーマンやか
びるるんをやつつけながら彼らは進んだ。ヒリート含むかびるん
るん達は逃げ出した。そして彼らは最上階まで迫った。

ドアを開けた。

「そこまでだ！ばいきんまん！」

だがアンパンマンが見たのは驚愕の光景であった。中身がすっかり
眞辺リチャードになつてしまつたばいきんまんが、ドキンちゃんを
膝枕に親指をくわえてしくしく泣き、そのドキンちゃんは慰めるよ
うに、リチャードの顔を撫でていた。ドキンちゃんはしょくぱんま
んを見て「お、イケメン」とこつそり携帯で写真を撮つた。リチャ
ードの顔は涙で化粧が取れてまだになつていた。

こんな弱々しい哀れな人間と戦つていたのか……とアンパンマンは思
つた。そして拳を下に下げる。

眞辺リチャードは泣きながらジャムおじさんを睨んだ。そして涙で
しわがれた声で叫んだ。

「い…飯綱…貴様の…恨みは…わすれヒックわすれないぞ…貴様が
何をしたか、お前ら知ってるか…？」

飯綱は彼が大学時代のあの眞辺である事に気がつき、さらに彼への悪
行を人造人間にバラすつもりだと察し、叫んだ。

「アンパンマン！彼を殺せ！」
アンパンマンはびっくりして答えた。

「いやしかし、これは…」

「何を言うか！わしの命令じゃぞ！殺せ！殺すんじゃああ！」

突然現したジャムおじさんの本性に彼は驚いた。あまりに哀れな眞
辺を殺したくはないが、飯綱の命令は絶対であった。どうしようか
悶々としていると「飯綱は言った。

「ええい優柔不断め、わしが殺してやるー！」

そして銃をかまえた。

どがががががが。

突然部屋が崩れて巨大な手が現れた。脱出したかびるんるんが、巨
大ホラーマンを修復して手動にしたのだ。エリートかびるんるんが
マイクで叫んだ。

「ばいきんまん様！」ちらへー。
ばいきんまんとデキンちゃんはホラーマンの手にすがり、逃げ出し
た。

「わしらも逃げよつ！」

飯綱達も逃げ出した。その際藍ちゃんと祐樹くんを救出した。多分読者のみなさんは彼らの存在なんぞ忘れていただろうと思つ。

そして戦車付近に来た時、突然飯綱が銃を構えて叫んだ。

「アンパンマン！貴様を『反逆罪で処刑する！』

そしてファシスト飯綱はアンパンマンの胸に向けてバキュンと銃で撃ち殺した。さつきとはエラい扱いの違いにメロンパンナは逆上し、叫んだ。

「何するんです！体殺したらもう終わりじゃないですか！」

「なあメロンパンナや。」

飯綱は言つた。

「お前思わなかつたか？はたしてアンパンマンに『体』が必要なのが。」

「…？」

「わしは思ったのじや。アンパンマンの力は頭の『ANCO』から出る。だから頭だけで十分じやと。」

「…？」

「だから用意したのじや。」

そう言つとアンパンマンの戦車のトランクが開きだし、中から大量のアンパンマンの顔が現れた。彼らは無表情な笑顔でかたかた動いていた。飯綱は命令した。

「あの飛行機ロボットを破壊しろ！』

するとアンパンマンの顔達は「ははは」「ははは」と抑揚なく笑いながら一斉に飛んだ。

「隊長！」

かびるんるんが叫んだ。

「隊長！なにか細かい丸いものが沢山こじらへ来ます。」

「 なに？」

「 ぱいきんまんは見た。最初は何だか分からなかつたが、やがてそれが大量のアンパンマンの首である事に気付いた。

「 ぎああああ！－！－？－？」

とうとうぱいきんまんのゲシュタルトは崩壊し、発狂した。彼は訳の分からぬ笑いをしていた。

「 ハツヒフツヘホーハツヒフツヘホーハツヒフツヘホー」

「 こんなのつて無いわ、ひどいわ。」

と再びメロンパンナは号泣した。アンパンマン達はホラーマンに攻撃した。

ずがががが～ん。

ゆづくりと炎上しながら墜落するホラーマン。背後で「アンパンマンマーチ」が虚ろに響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457m/>

A N P A N M A N ~驚異の真実~

2010年10月8日12時46分発行